

## 星槎大学機関リポジトリ

論文種別	資料
タイトル	安心・安全な場で語り合いと自己肯定感―第3回星槎ラウンドテーブル (2021年9月26日) 報告―
Title	
著者	三輪建二・大瀧悦子・川田奈津子・小嶋希・高橋瑞穂・多田奈穂・ 谷島玲子・三好加奈子・茂木正浩
Author(s)	MIWA Kenji, OHTAKI Etsuko, KAWADA Natsuko, KOJIMA Nozomi, TAKAHASHI Mizuho, TADA Naho, TANISHIMA Reiko, MIYOSHI Kanako, and MOGI Masahiro
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	<i>Seisa University Research Studies in Education</i>
巻	Vol.3
号	No.2
ページ	pp.33-37
発行日	March-28-2022
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1486/00000282/">http://id.nii.ac.jp/1486/00000282/</a>

## 資料

## 安心・安全な場での語り合いと自己肯定感

## ——第3回星槎ラウンドテーブル（2021年9月26日）報告——

三輪建二<sup>1,a</sup>・大瀧悦子<sup>1,b</sup>・川田奈津子<sup>1,b</sup>・小嶋希<sup>1,b</sup>・高橋瑞穂<sup>2,c</sup>・多田奈穂<sup>1,b</sup>・谷島玲子<sup>2,d</sup>・三好加奈子<sup>3,e</sup>・茂木正浩<sup>2,e</sup>

（1 星槎大学大学院教育実践研究科・2 星槎大学大学院教育学研究科

3 星槎大学客員研究員）

## 1. はじめに

第3回星槎ラウンドテーブルを2021（令和3）年9月26日に開催した。ラウンドテーブルとは、自分の思いを「物語り」、その語りを「聴き」意見交換し合う場である。過去2回、星槎ラウンドテーブルを実施して、参加者が安心して話し、聴き合える「安心・安全の場」を作れるように意識した。また2回のラウンドテーブルや大学院生から聞こえてくる声などをもとに、ワーキンググループ（以下WG）でテーマについて話し合った。結果「再発見！自分にはいいね」に決定した。そのテーマに至った背景は次の通りである。

- ① コロナ禍で大学院のキャンパスに足を運んだことがない大学院生が多い
- ② 大学院生同士が実際に会って、対面で話したことがない大学院生が多い
- ③ 交流が少なく、研究の進み具合に不安や孤独感をもっている大学院生が多い

コロナ禍のため、対面で話す機会が少なく、研究の進み具合に不安や孤独感をもっている大学院生の話はよく聞いていた。この環境下では、不安や孤独の気持ちをもつことは自然なことである。今回は、不安や孤独感を拭き去るだけでなく、認めてもらいながら物語り、聴き合うことで新たな自分の一面に気づき、考え方や研究の進め方のヒントを得て、自己肯定感を高めて欲しいとの意見も出た。メンバーで話し合ったそれらのことを踏まえ、テーマを「再発見、自分にはいいね」に決定した。（茂木 正浩）

## 2. 準備段階

WGの打ち合わせを表1に示す。

## 1) 星槎大学大学院としてのラウンドテーブル

WGメンバーは4名が新規で参加し、10名での活動となった。顧問の三輪先生やオブザ

---

2022年3月9日受理

- a 星槎大学大学院教育実践研究科教授
- b 星槎大学大学院教育実践研究科専門職学位課程
- c 星槎大学大学院教育学研究科修士課程
- d 星槎大学大学院教育学研究科修了生
- e 星槎大学客員研究員

表1 ワーキンググループ打ち合わせ

回	実施日	主な議題
第1回	2021年 6月25日	WG新旧メンバーの顔合わせ、自己紹介・役割分担 前回活動内容報告、ラウンドテーブルの目的・進行の確認 第3回ラウンドテーブルの日程の決定
第2回	7月30日	ラウンドテーブルのテーマの決定と内容の確認 参加者募集・名簿管理
第3回	8月27日	ラウンドテーブル当日の詳細の検討 「語りのメモ」作成のアナウンス、Google ドライブ
第4回	9月15日	参加人数、グループ分けの最終調整 ファシリテーター会議、オープニングスライド確認
第5回	9月25日	ラウンドテーブル当日の最終確認（進行・役割分担）

メンバーの存在もあり、星槎大学大学院としてのラウンドテーブルに込めた先輩方のねがいを引き継ぎつつ、「星槎ラウンドテーブル」として確立していきたいと検討を重ねた。新規メンバーはラウンドテーブル未経験者が多く、Slack や Google ドライブの活用も初めてであった。そのため、旧メンバーからの「豆知識」や学習会を行い、円滑な運営に努めた。

## 2) Slack チャンネル

ラウンドテーブルでは、コミュニケーションアプリの1つである Slack を活用している。Slack では、過去のチャットやデータを共有し、共同で作業できるため、WG ではなくてはならないものになっている。困ったときはいつでも Slack を遡り確認していた。参加者では教育実践研究科（P）・教育学研究科（M）・博士後期課程（D）・修了生で共有できるものとして、参加者募集や全体周知の目的で活用している。しかし、Slack を普段から活用していない方も多く、導入にむけては個別に対応を行った。Slack を活用しない者へもメールで個別連絡を行ない、情報伝達の漏れが無いよう努めてきた。今後の参加者への運用はより使いやすい方法を検討していく。

## 3) 参加者募集と語りのメモ

募集は7月末から実施した。告知は Slack に加えて授業やゼミ、メールなど、個々のつながりから行った。顧問の三輪先生の働きかけで P・M・D の google classroom、星槎ジャーナルへの投稿などからも広く募集した。その結果、学科生だけでなく、修了生や客員研究員、教員の参加もあった。「語りのメモ」は発表資料や原稿ではなく、ちょっとしたメモを事前に共有することで、安心・安全なラウンドテーブルにつながっている。（小嶋 希）

## 3. 当日の進行

当日の実施内容と進行を表2にまとめた。

### 1) 参加者とグループ分け

登録の参加者は49名、内訳はWGメンバー12名、前回からの参加者18名、新規参加

表2 当日の実施内容と進行

時刻	内容
8:30	ZOOM への入室開始
9:00	開会《WG 司会》
9:05	ラウンドテーブルの説明《WG リーダー》
11:00	ラウンドテーブル開始《異業種4名程度のグループ編成》 ラウンドテーブル終了と記念撮影と感想交流の説明《WG 司会》
11:10	感想交流《8名程度のメンバーをランダムにグループを編成》
11:50	三輪顧問からのコメントとWG全メンバーの一言 14WGメンバーから参加者へと1人一言感想を発表 諸連絡《WG 司会：アンケートについてアナウンス》 12時に終了

者 19 名であった。所属の内訳は教育実践研究科院生 22 名、教育学研究科修士課程院生 9 名、同博士後期課程院生 5 名、客員研究員・修了生 11 名、教員 2 名であった。

事前に所属や職種等が分散されるようにグループ分けをした。WG メンバーはファシリテーターとして各グループに配置した。当日のキャンセルもあったが、混乱することなく進められた。後半の感想交流はランダムにグループが編成されるため、前半と同じメンバーになってしまったグループもあった。（川田 奈津子）

## 2) 司会の担当

今回のラウンドテーブルでは、司会を担当した。初めて参加したので、進行内容を何度も確認し、決められたスケジュールで進行できるように行った。Zoom での開催ということで、インターネット環境が常に安定していることは重要な要素であった。この部分に関するトラブルが起こった場合にはタイムマネジメントに大きく影響を与えることから、事前に起こり得るトラブルと対処法をグループ内に提起し、打ち合わせておく必要があったと振り返っている。これも実際に会場を設置しない、オンライン上の交流会だからこそ留意すべき事柄ではないか。またチャットを利用し、突発的な確認作業を特定のメンバーと行いながら進行を続けることができた。（多田 奈穂）

## 3) ファシリテーターとして

参加した方が物語り、聴きあうことで、改めて自分に「いいね」ができるとよいと考えていた。始まるとそのことも忘れてしまうほど参加した方々の話に惹かれ、ついつい関心の赴くまま問いかけてしまい、途中で自分の立場に気付き役割に戻るということを繰り返していた。後半は人数も多くひとりひとりが感想を伝えるだけになってしまい、深めることができなかったのが反省点である。ファシリテーターの難しさを改めて感じていた。しかし、自身の考えの新たな気付きや変容を話す方もいたことで感想交流の趣旨を理解されている参加者のみなさんに助けられていた。（川田 奈津子）

## 4. アンケート調査から

アンケート調査では実際の参加者 47 名（ワーキングメンバー含）中 37 名から回答があっ

た。異業種でも理解してもらえた、分野を超えての情報や考えの共通は視野が広がった、など他職種との交流を望む声が多く聞かれた。自由記載には、全身全霊で聞いて下さる方たちがいて心の底から嬉しかった、などの他者との交流についての感想があった。

参加満足度も高く 97%が次回も参加したいと回答した。参加者全員の協力で安心して語れる場づくりができたのは、本校の約束の「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」という気持ちを持つ者が多く在籍しているということではないかと考える。（大瀧 悦子）

## 5. 第3回星槎ラウンドテーブル振り返り：安心・安全な場をめぐって

最後に WG メンバーの振り返りの文章を掲載したい。大野先生に触れているものもある。

今回のグループでは、大野先生とご一緒させていただいた。少し疲れているのかな？と感じた所もあったが、授業ではない大野先生の語りは思い出を語るように優しく穏やかな語りでした。一変、「院生として今、私たちができることは？」という問いに、いつもの大野先生で力強く「自分の実践を書くこと！」と伝えてくれました。やりっ放し、考えたまま…ではなく、「書く」。自分に不足しているところをズバリ指摘された気持ちになりつつ、実践家としての心構えを教えられた気がした。大野先生の言葉を胸に、「書くこと、じっくり省察すること」は苦手だけど、ちょっとずつ実践していこう。（小嶋 希）

交流が減り、孤独を感じる院生が増えるコロナ禍。そんな時だからこそラウンドテーブルの価値の高まりを感じる。星槎大学大学院は、多様な社会人大学院生が在籍している。そのため、ラウンドテーブルでは研究や社会課題に対して俯瞰して考える絶好の機会となる。また、実際に教育や看護現場等で抱えている課題に真摯に向き合う院生の話を聴き合うことで気付きが生まれ、自分が認められているという感情が芽生えてくる。心を開放して話を聴き合う仲間がいる、その空間がラウンドテーブルの醍醐味である。（茂木 正浩）

ラウンドテーブルに集まる方々の住所は様々である。オンラインだからこそできるつながりである。画面上の私の隣の方の隣は私なのであるだろうか。オンラインに少し慣れてきた私はふとそのような疑問をもった。第2回の感想交流の際に「なぜ研究者に？」の私の問いに対して、大野先生は「隣の先生のため」と答えられた。大学院での私の隣の人は、日々の仕事や家事の中から課題を見つけ、時間を捻出して別の隣の人のために研究している。自分に「いいね」を出しながら、これでよいのかと不安に思い、考えている。多くの方の「参加してよかった」のコメントに素敵な隣の人と交流できる場をつくれたことを嬉しく思う。（川田 奈津子）

参加者が画面と向き合うと、ほぼ初対面の面々が画面に映し出されるのと同時に、お互い顔を突き合わせ話すようなリアル感、ゆるり特殊な世界感を体感する。初めはシャイであったり緊張の面持ちであったりしつつ、「語り手の話を聴く」に全集中する。そして肯定的な場で過ごすうち、参加者の目は輝きを増す、語り手とのシンクロから聴き手の目は煌

めく涙で覆われる、など各々置かれた場で様々な色が今回も生まれていた。コロナ禍で参加者招集に苦慮した初WGメンバーは、学生交流に希少価値を見出した。（高橋 瑞穂）

「ラウンドテーブルとはこういうもの」という決まりは特にはない。最初はそれが不安だったが、体験してみると、この会にはたくさんの自由度があり、その場で持ち寄った話が広がることで、テーブルの雰囲気ができあがっていた。日常生活の気になった事柄について、初めて会う人たちと語る。経験が違っても遠くない感情を共有し、住む場所が違うことで起こる戸惑いも、他者の目を通してその感覚が理解できた。ここが安全な空間であると保証されているからこそ、ありのままに自分を出すことができ、深い理解になるのだと思う。たまたまその日テーブルを囲んで話したことが受け入れられ、ラウンドテーブルの中で起こる相互作用が自分自身を紡いでいくことになるのだと感じた。（多田 奈穂）

「目の前の仕事をするだけです」ラウンドテーブル第2回目で同じグループになった時の、私の質問に対する大野先生の言葉である。2年間の大学院生活では、他者と深く話す機会はそれほど多くない。大野先生との機会は、あの時が最初で最後だった。ラウンドテーブル参加者には、それぞれに意味のある出会いがある。短時間でも、柔らかに他者の心に触れて、ありのままの自分を差し出すことができる時間は貴重だ。私は初回から【出来ることをやっ払いこう】という思いでWGに関わってきたが、今後は、大野先生がラウンドテーブルに関わり続けた意味をも考えて継続したい。（三好 加奈子）

ラウンドテーブルは学生生活の語り合う学びの場を補足するものだ。3回の実施とも出席者の満足度は高かった。自分の語りたいことを15分話す。メンバーはひたすら聴き、思いを受け止める。非難はしない。ファシリテーターはいるけど、頃合いをみて終了の合図をする。緩い！でも、聴いて貰った満足感・自分への肯定感が高まり、気持ちよい。まるで居酒屋で年齢も職種も学生も教員も関係なくしゃべり、笑いあった時みたいだ。ラウンドテーブルは大学院にとって学生の学びを分かち合える場として大切だと思う。（谷島 玲子）

大野先生と星槎ラウンドテーブルとのつながりは深い。先生はメールで、「一参加者として参加したい」と問い合わせて下さった。第2回と第3回（今回）の2回のご参加だったが、自身の教育実践への思いを熱く語られていた。大学院での安心・安全の場での語り合いの意味を全身で受け止め、姿勢として示されていた。先生は事前に4回分の「語りのメモ」を提出されていた。残り2回の語りのメモを参加者に披露する機会がないことは残念だが、その思いとメッセージはしっかりと参加者にも受け継がれている。星槎ラウンドテーブルを継続することで、大野先生の思いを継承していきたい。（三輪 建二）